

地名の由来と史跡と文化財

南総地区（内田編）



原田諏訪神社

上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会会員）

令和3年2月編集・製作

まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちほら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社とされていますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社とされています。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていたのですが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

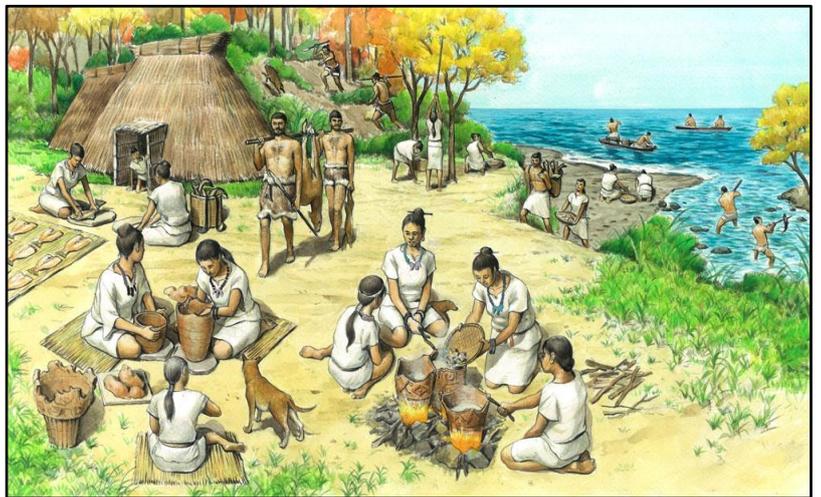
北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「三和地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



市原郡内の牛久地区の地名の由来

千葉県の名の由来

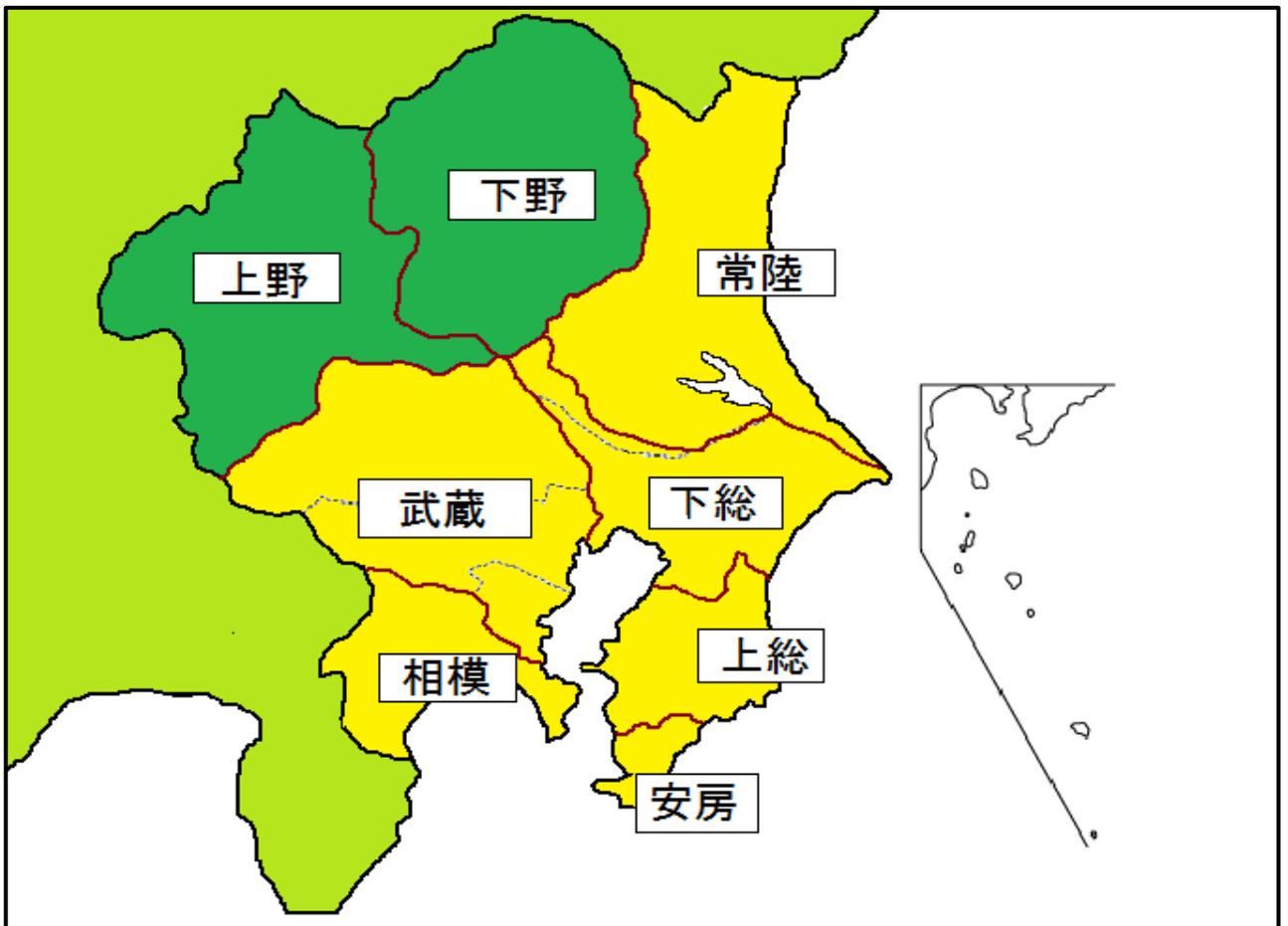
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原市の地区別地図

020/9/26

行政区-scaled.jpg (1829×2560)



市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の6郷

1・海部郷（あまのごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

2・市原郷（いちはらごう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

3・湿津郷（うるつごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な涌泉があることから命名された地名と思われる。

4・江田郷（えだごう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

5・菊麻郷（くくまごう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

6・山田豪（やまだごう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

内田地区（安久谷・石川・市場・江古田・奥野・島田・宿・真ヶ谷・原田・堀越・水沢・米沢）

概説

養老川本流に隣接する安久谷・江古田の南総中遺跡では、同一区域で旧石器、縄文、弥生、古墳各時代の遺構や遺物が発掘されている。中でも方形周溝墓の弥生時代中期における存在の確認は貴重な資料を提供している。このようにこの地域には、古来から人々が生活を営むのに適地であったことが窺える。また、石川には須恵器を焼成した窯跡があり、奈良時代後期から平安時代にかけて不入永田窯と共に須恵器の供給地であったことが判明している。

内田の歴史が文献に登場するのは、行基の彫った仏像が安置し、国家安泰を願ったと伝えられる太子堂寺が1177年に真ヶ谷に創建されたことが最初であり、その後1521年には里見家多賀氏が石川に龍溪寺を創建したことが記されているが、政治史の舞台には載っていない。ただ真ヶ谷の要害台及び米沢、石川などに山城があるが年代、城主、経緯との不明です。

江戸時代の寛政5年（1793年）当時は、島田・奥野・水沢・真福寺・真ヶ谷は旗本永井氏の知行で、それ以外は三千石の旗本伊丹氏の知行であり、宿に陣屋を構えていた。

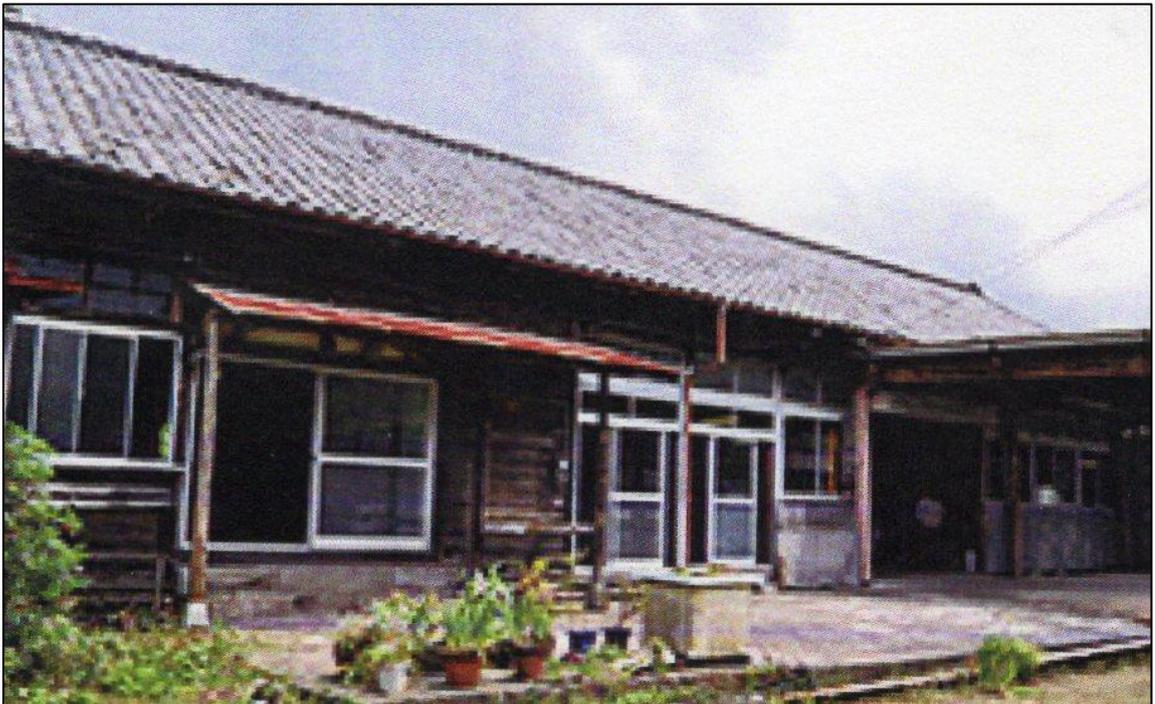
内田村は、承応年間（1652年～1654年）には伊丹播磨守の知行となったが、当時は内田郷と称した。享保年間（1716年～1735年）に上内田・下内田両郷に分かれ、上内田は水沢・奥野・市場・堀越・島田・宿の6村、下内田は真ヶ谷・真福寺・腰巻・大西・安久谷（悪谷）・江古田・原田・石川の8村であった。幕末には、真福寺・腰巻・大西の3村が合併して米沢村となった。

明治元年（21868年）に一時宮谷県所轄となったものの、同年12月鶴舞藩井上正直氏の領地となった。明治4年鶴舞藩が廃止され、木更津県所轄となり、同6年千葉県所轄となった。

明治9年には区制のもと市原郡（第5大区）の11小区として安久谷に役所が置かれたが、その後11年には上下の内田郷は牛久村、鶴舞村に分割された。

明治22年の町村編制法により、旧内田郷12か村が合併して内田村となり、役場は宿に置かれた。

大正12年には郡制が廃止された。昭和29年には南総町となった。



旧市原市立内田小学校校舎（現 NPO 法人内田みらい楽校）

安久谷（あくや） 神社・寺院・史跡文化財・城址 拾貳天神社・安楽寺（天台宗）

江戸期は安久谷村。悪谷とも書く。もとは内田村の一部で、元禄年間（1688年～1704年）以前に分村した。江戸期は内田を冠称。

地名の由来は、「あし（崖）・や（谷）」の転訛で、崖のある傾斜地という意味。

拾貳天神社（じゅうにてんじんしゃ）

所在地 市原市安久谷249番地

創建時期 不詳

祭神 国常立命

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。諏訪神社の境外末社。
火災で本殿焼失。昭和54年（1979年）に地区の集会場を建て、その敷地に奉斎し現在に至る。



安久谷の拾貳天神社の社

安楽寺（あんらくじ） 天台宗

所在地 市原市安久谷252番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 石井 堯将

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳



石川（いしかわ） 神社・寺院・史跡文化財・城址 八坂神社・福圓音（天台宗）

江戸期は石川村。もとは、内田村の一部で、元禄年間（1688年～1704年）以前に分村した。

地名の由来は、石の多い川という意味。

八坂神社（やさかじんじゃ）

所在地 市原市石川字小山557番地

創建時期 不詳

祭神 須佐之男命

宮司 松井由香里

由緒・伝説 創建年代、由緒不詳。諏訪神社の境外末社

石川八坂神社の本殿社



八坂神社参道入り口の鳥居



本殿右側を写す



本殿内部の内宮と祭壇

愛国山福圓寺 (あいこくさんふけえんじ) 天台宗

所在地 市原市石川413番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 河邊 堯園

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳

福圓寺の本堂正面



福圓寺本堂内部の祭壇



境内に並ぶ石仏と石碑



本堂の右側を写す

安寧山龍溪寺 (あんねいさんりゅうけいじ) 曹洞宗

所在地 市原市石川字石川台1121番地1

本尊 不詳

住職 渋谷昌道

由緒・伝説 大永元年(1521年)に益芝明周和尚により開山、創立された。その後元龜3年中(1573年)に池和田城主多賀蔵人の開基で寺院境内には多賀氏累代の墓碑がある。また寺伝によると境内に徳川幕臣・林吉忠の墓がある。吉忠は、上林越前守の長子で藤四郎と称したが林忠政の養子となった。請西藩主林忠宗の祖先にあたる。



龍溪寺の本堂全景



昭和建造の山門



龍溪寺本堂の内部



境内にある六地藏



木造釈迦如来坐像 市原市指定重要文化財

所在地 市原市石川 1121 番地 1

所有者 安寧山龍溪寺所蔵

種類 彫刻

説明 この釈迦如来坐像は、頭部に宝冠を表し、髻を結ぶ様は、珍しい明朝様式の菩薩形で、禅宗系特有の釈迦如来の姿です。

像高 94 cm、彫眼、金泥と漆仕上げの寄木造りで、衣の裏に朱を入れます。台座・光背とも同時期の作で、像背面に「肥前之国長崎 唐山仏師 方超印」と「寛保 2 年」（1742 年）と墨書されていますが、これより遡る作風が見られる。



市場 (いちば) 神社・寺院・史跡文化財・城址 八坂神社

江戸期は、市場村。もとは、内田村の一部で元禄年間（1688 年～1704 年）以前に分村し、江戸期は内田村を冠称。地名の由来は、かつて当地で市場が開かれていたことに由来する。

八坂神社 (やさかじんじゃ)

所在地 市原市市場字米の台根 544 番地

創建時期 不詳

祭神 須佐之男命

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。昭和 57 年に神社所有の山林の一部を売却し、同 58 年に社殿再建。諏訪神社末社。



江古田 (えこだ) 神社・寺院 大宮神社

江戸期は江古田村。もとは内田村の一部で元禄年間（1688 年～1704 年）に分村した。但し、江戸

期を通じて内田村としても機能し、享保年間（1716 年～1736 年）は下内田村の内ともみられる。

地名の由来は、「えご（川の片隅）・他（処）」で、養老川の側の土地という意味。

大宮神社

所在地 市原市江古田字上原臺 252 番地

創建時期 不詳

祭神 大名持命

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 原田の諏訪神社の末社。創建年代、由緒不詳。伊丹摂津守心信により享保年間に再建された。



江古田大宮神社の本殿の建物

境内に疱瘡神社（大己貴命・少名彦命・石宮）がある。



大宮神社境内の入口の鳥居



疱瘡神社の石碑



奉納された手水鉢。年代不詳

奥野（おくの） 神社・寺院・史跡文化財・城址

江戸期は奥野村。もとは内田村の一部で、元禄年間以前（1688年~1704年）に分村した。

地名の由来は、「おく（奥）・の（野）」で、谷の奥の山麓の傾斜地という意味。

龍蔵寺（りゅうぞうじ） 天台宗

所在地 市原市奥野406番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 平野 宏栄

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳・境内の墓石に天保年間のものであるので江戸時代後期にはあったと思われる。

奥野龍蔵寺の本堂正面



奥野城址（おくのじょう）

所在地 市原市奥野

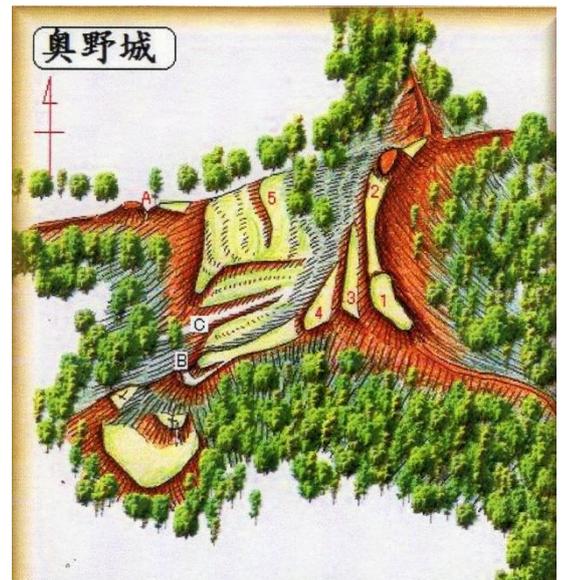
築城時期 不詳

築城主 不詳

説明 奥野自治会館のある尾根の北側の尾根を登った所に城址です。

山上にはそれほど大きなスペースはないがそれでも尾根を削平した2の郭が細長く延びて居る。その南側の一段高くなっている部分が場内最高所の平場で、ここに1郭があったと思われる。頂上部を削平することで長軸30mほどの平場を構成し、その東南が尾根続きになるが、尾根との間には深さ6mほどの切岸がある。堀切にはなっていないが明確な分断意図を見てとることができる構造です。

1郭から2郭にかけての東側は、断崖のような急斜面となっており、登攀は困難です。2郭から西側にかけては、3・4といった腰曲輪が2段あり、その先に、ほぼ自然地形の



尾根が伸びている。この先端下にはBの堀切がある。その先に5の平場があるが、下の平場も含めて緩斜面が多く、削平についてはかなり甘い郭です。またその先にも平場の先に切岸があり、その先端部に「市原の城」には「この城の唯一の堀切」とするAの堀切があるが、藪がひどくて確認できない。

4の尾根と5のある尾根との間の谷戸部分に、Cの切通しが入れていることで、一見すると虎口と思われます。その両側に郭が存在しているので、虎口に迫る敵を攻撃するには格好の場所であり、技巧的な構造物と見える。

奥野城は、簡素な造りの小規模な城郭で、古い時代の、地元領主の詰め城、あるいは地元住民の避難所のような城と思われる。



国道409号から見た奥野城址



Bの堀切り状の部分



2から1郭の城址を見た所

島田 (しまだ) 神社・寺院・史跡等は無し。

江戸期は島田村。もとは内田村の一部で、元禄年間(1688年~1704年)に分村した。

但し、江戸期を通じて内田村として機能し、享保年間以降(1716年~1736年)は上内田村の内であった。地名の由来は、「しま(集落)・だ(処)」で、集落のある所という意味。

宿 (しゆく) 神社・寺院・史跡文化財・城址 三嶋神社・長栄寺(天台宗)・木造十一面観音立像

江戸期は宿村。もとは内田村の一部で、元禄年間(1688年~1704年)に分村した。江戸期を通じて内田村としても機能し、享保年間以後(1716年~1736年)は上内田村のうちとも見える。

地名の由来は、(すき(剝))の転訛で、崩落地の地滑り地名。

三嶋神社 (みしまじんじゃ)

所在地 市原市宿字壺の台214番地

創建時期 不詳

祭神 大山祇命

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 創建年代・由緒不詳。境内に天神社(藤原道真)がある。諏訪神社の末社。

宿の三嶋神社の本殿



三嶋神社入口の鳥居と参道



三嶋神社本殿の内宮



天神社の本殿の社

延命山長栄寺 (えんめいさんちょうえいじ) 天台宗

所在地 市原市宿字家之台223番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 石井 堯俊

由緒・伝説 本尊は十一面観音菩薩で、この尊像は弘法大師の作で笠森寺にある観世音菩薩と同じ木から彫ったものと伝えられる。
詳しくは文化財の紹介コーナーで。



長栄寺の本堂全景



本堂正面入口と扁額



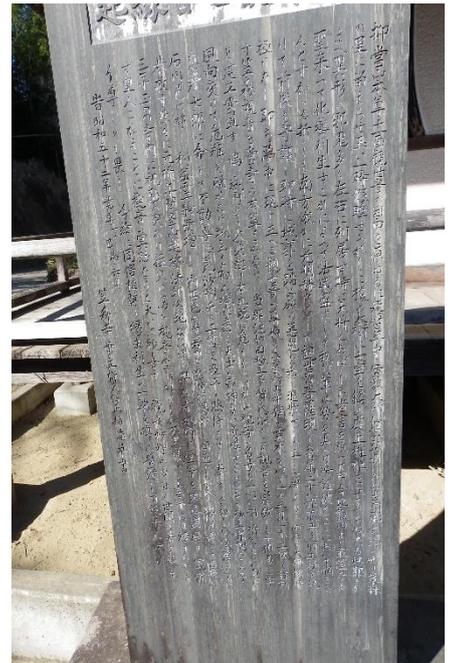
本堂前の手水鉢と石佛



墓石や石仏像などが並ぶ



江戸時代に作られた石段



千葉県の指定文化財の十一面観音立像の由来の説明石碑

木造十一面観音立像 (千葉県指定重要文化財)

所在地 市原市宿字家之台223番地

所有者 延命山長栄寺 所有

種類 彫刻

説明

長栄寺の御本尊、木造十一面観世音菩薩は弘法大師の作と言われていたが、「鎌倉時代の仏師賢光」の作と言うのが背面材内面の墨書で判明している。寺伝によると、弘法大師が笠森の深山で休憩し仮眠をとっていた際、数多くの邪鬼が現れ大師を悩まそうとした所、南方より光が放たれ観世音菩薩と眷属二十八部衆が現れ悪鬼を退けるとい夢を見た。そこで大師は当地の木を用いて一つの木から二つの菩薩を彫り出したという。長栄寺の御本尊は、池和田城主多賀氏が崇敬し、榎堂という所にお堂を建立して安置していた。ある時、場内に出火が起きた時に城主が観世音の名を唱えたところ風向きが変わり、建物は無事であった。靈験を感じ入った城主は、子息・彦七郎に命じて不動明王・毘沙門天の二像を作らせ、観音像の左右に置かせた。多賀氏滅亡の後、尊像は石川村に移された。寛保年間に寺院が焼失する火災が起きたが、猛火の中「観音堂は焼け残ったという。

十一面観世音観音像は、カヤ材の一木割矧造の木造で、像高は159cmです。右手に地蔵菩薩の持ち物である錫杖を持つ長谷寺式特有の観音像です。頭体幹部は、髻（もとどり）の頂から像の地付きに至るまでを一材から彫り出し、左耳後ろ、右耳半ばを通る線で前後に割り矧いで、内割りのうえ、両耳で面部を割り矧ぎ、玉眼をはめ込みます。

像内の墨書銘から、文永元年（1264年）に仏師賢光が、奈良県桜井市の長谷寺の十一面観音像を模して造った等身像であり、その後この地域から大きく動かずに伝来してきたことが分かっている。

賢光は、鎌倉時代の後期に下総を中心に活躍が知られる仏師です。現在、賢光によるものと確認されている在銘作品は7躯が知られ、賢光作と推定される像もいくつかある。

本像は、正嘉元年（1257年）銘の長徳寺不動明王立像（匝瑳市）に次いで古い作例となり、最初の天福寺十一面観音像（千葉市）から本像へと至る、賢光の十一面観音立像の作風の変遷を知る事が出来ます。たくましい量感を力強い彫技で明確に示した本像は、仏師名とその製作年代や伝来がわかる在銘作品として、また十三世紀中頃の房総地方における政策水準を示す本格作として、大変貴重な仏像彫刻です。

長栄寺内の「千葉県指定有形文化財の説明分より」



真ヶ谷（しんがや） 神社・寺院・史跡文化財・城址 荒沢神社・太子堂寺（真言宗）・真ヶ谷城址
江戸期は真ヶ谷村。もとは内田村の一部で、元禄年間（1688年～1704年）に分村した。但し江戸期を通じては内田村としても機能し、享保年間以降（1716年～1736年）は下内田村のうちとも見える。真言宗太子堂寺があり、もと箱根権現別当源海阿闍梨の開基で、源頼朝より十三仏、その他の仏具の寄進を受けたと伝わる。

地名の由来は、（しん（新）・が（接続詞）・や（傾斜地）」で、新しくできた傾斜地、つまり崖崩れがあったことを意味する。

荒沢神社（あらさわじんじゃ）

所在地 市原市真ヶ谷字瀧上谷373番地
創建時期 不詳
祭神 日本武尊
宮司 松井 由香里
由緒・伝説 往古は岩窟に安置してあったが、文化13年（1816年）に遷宮。文久4年（1864年）に火災により焼失したが再建し、現在に至る。近くに聖徳太子堂寺がある。



荒沢神社の本殿の正面



荒沢神社の参道の石段



本殿内部の祭壇



境内の本殿右に手水鉢

聖徳山宝珠院太子堂寺 (しょうとくさんほうじゅいんたいしどうじ) 真言宗智山派

所在地 市原市真ヶ谷字天神畑 2 1 番地

創建時期 文治 2 年 (1186 年) とされる。

本尊 不詳

住職 加藤 快雄

由緒・伝説 縁起によれば、当山の開基は源海阿闍梨と言われ、大師像は行基の作で天平宝字 2 年伊豆箱根両権現に行基が参詣した際、天下泰平国家安全を願っていると、太子の霊が現れて行基に「自分の尊像を彫れば末永く国を守ろう」との言葉を賜ったことから、行基は三体の大師像を彫り、一つを箱根山の麓に安置した。のちに源頼朝の師であった開性房阿闍梨が尊像を拝していたが、頼朝の夢にこの像が現れ仏力を添えようと告げた。その後平家追討の院宣を受けた。源平の争乱により乱れた国に安置することを危惧した源海阿闍梨により尊像は当国へ運ばれ、当寺に安置され「聖徳山宝珠院太子堂寺」と号した。石橋山の戦いに敗れて敗走してきた源頼朝が、当寺を参詣した際、尊像がここにあることに深く感銘を受け、弘法大師作の仏具等を寄進している。



太子堂寺の本堂正面



入口の 16 片の菊の紋と桐家紋



境内にある石碑群

真ヶ谷城址 (しんがやじょう)

所在地 市原市真ヶ谷字要害

築城時期 室町期

築城主 三上氏 (佐々木氏の一族)

説明

真ヶ谷城は、この地方の豪族の三上氏の城とされています。三上氏は、佐々木氏の一族であり、室町期には古河公方成氏に仕えたと言われます。その後、小弓公方にも仕えていたが、弘治元年 (1555 年) 3 月に、丸谷如閑 (真里谷如鑑) に攻められて落城



した。その後三上氏は北条氏を頼り、岩槻城の北条十郎に仕えた。

真ヶ谷城は、上総牛久駅の東側2 kmにある真ヶ谷の集落の背後にそびえる比高50 mの山上に築かれていた。主郭と言われるのは、鳥瞰図の1・2の2段構造の郭となっていた。この郭は、北側を大堀切で画し、その方向に土塁も持ち、側面には腰曲輪を配していた。郭の大きさはそれほど大きくなかったようだ。それよりも、城の中心にあり、もっとも広いスペースを持った3の郭が、実質的な中心の郭であったと思われる。1・2の郭と3の郭とは、それぞれ独立性が高く、郭の重要性という点については、それぞれの役割をもっているようにも見える。1郭の北側は、大堀切で区画されている。

さらにその先には4の郭があるが、そこを進んでゆくと進路が尾根上になり地勢が上がって、5の小郭に到着する。5の小郭は一辺が6 m程しかないが、周囲に土塁を巡らせてさらにその先は堀切で区画されていて、その先の尾根に続いている。3の郭の尾根にも、堀切などが見られる。この城の1・2・3郭が畑地となっていて割合歩きやすいが、3の郭の南側は尾根になっており、藪が深く自然の地形に近いが、下の方には腰曲輪がしっかりと出来ている。また、この尾根の東下に「堀の内」「殿部田」と言った地名が残されており、古き時代の城館はこの方面に置かれていたと思われるが、位置は不明です。



(う)の薬研掘りの堀切



1郭と2郭の2 mほどの段差



(い)の深さ5 mほどの大堀切



5の郭に先端にある堀切



5の郭の所にある1辺6 mの土塁



(え)の所にある虎口状の部分

原田 (はらだ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 諏訪神社・本伝寺(単位)・原田城址

江戸期は原田村。もとは内田村の一部。元禄年間以前(1688年~1704年)に分村した。但し、江戸期は内田村として機能し、享保年間以降(1716年~1736年)は下内田村のうちとみられる。地名の由来は、「はる(張)・た(処)」の転訛で、洪水時に瑞は張る土地と言う意味。

諏訪神社 (すわじんじゃ)

所在地 市原市原田字道上310番地
創建時期 明暦2年(1656年)に落成。
祭神 建御名方命 神紋 左三つ巴
宮司 松井 由香里

由緒・伝説 旧郷社。当社は領主伊丹氏が、慶安4年（1651年）に幕府の命により由井正雪一党を捕縛する時、信濃国の諏訪神社に祈願し成就したことから、承応3年（1654年）に建築を始め、明暦2年に落成した。以後日吉神社（大山咋命）に変わり内田郷の総鎮守となり、日吉神社は境内末社の一つとなった。他に境内に合社として秋葉神社（火産魂命）・日吉神社・稻荷神社（稻倉魂命）・大宮神社（大名持命）があり、天神社（菅原道真）もある。境内には相撲の土俵が造られている。



原田諏訪神社の拝殿の正面



参道の石畳みと狛犬・石階段



神社の案内看板と相撲の由来



左から拝殿・幣殿・本殿の建物

如意山本伝寺（によいさんほんでんじ） 単位（元顕本法華宗）

所在地 市原市原田字堰下216番地
 創建時期 文明6年（1474年）の開基
 本尊 不詳
 住職 木村 乾行
 由緒・伝説 元顕本法華宗の寺院ですが、昭和23年に独立。現在は単位寺院となっている。文明6年に日泰上人により開基された。領主伊丹氏の菩提所で、山門は飛騨の甚五郎作と伝えられている。寺宝に伊丹奉納の幕、日蓮聖人自筆の曼荼羅がある。その他にも、三宝尊・日什上人像・日泰上人像・四菩薩・四天王・普賢菩薩・文殊菩薩などが修復され安置されている。また、鬼子母尊神や山門の再建が行われている。

本伝寺の本堂全景



本堂内の祭壇に安置される本



平成5年に再建された鐘楼



鐘楼、釣鐘再建の記念碑



境内入口の山門と参道



平成13年に再建された三門



境内には十三重の宝塔も

原田城址 (はらだじょう)

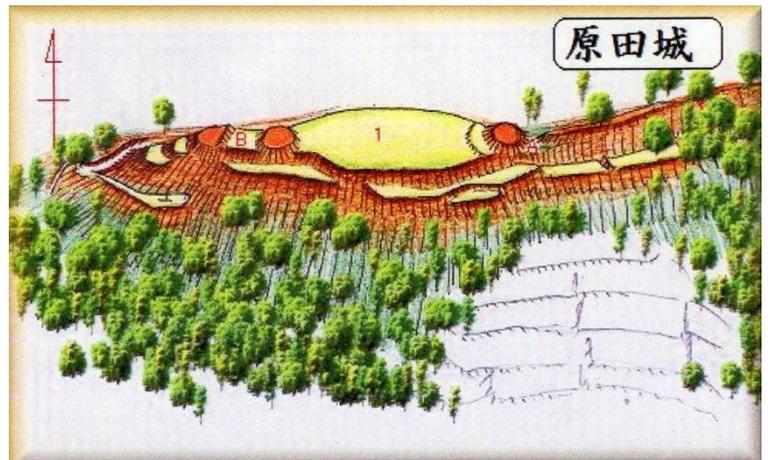
所在地 市原市原田字金谷辺田

築城時期 鎌倉期と思われる。

築城主 伊丹氏と思われる。

説明 原田城は、小高春雄氏が「金谷辺田」の地名を手掛かりに見つけた城址です。

原田城は、国道409号線と「うぐいすライン」が合流する地点の南側100m程の所にある比高30mほどの台地先端部付近が原田城址です。



尾根上には長軸90m程の平坦な1郭があり、きちんと削平された郭です。尾根続きの東側には古墳が1基あり、そのまま土塁として利用したと思われる。ここにはきちんと堀切を入れべき所ですが造り甘く感じる。しかし、側面に切岸とそれによって生じた腰曲輪を配置し西側の先端部は、切岸加工を施した為、数段の小郭が連続する構造になっている。このように側面と西側に関しては、きちんとした防御思想が伺える。西側の先端下からの防御には気を使っているのに、東側の尾根続きの防御には大して意識していないのが不思議な城郭だ。1郭の西側にも古墳がある。その先には堀底のようなBがある。その先が土壇状に高くなっているの、堀底のように見える。Bの西側の土壇は、櫓台と思われる。

原田城は、比較的規模が小さく、臨時に築城された城で、それほど長期間使用されたものではないと思われ、戦国時代前半期の古いタイプの城と考えられる。



北側から見た原田城址の台地



1郭東側にある古墳址。櫓台か



西側先端の数段連続の平場

堀越 (ほりこし) 神社・寺院・史跡文化財・等はなし

江戸期は堀越村。もとは内田村の一部。元禄年間以前(1688年~1704年)に分村した。但し、江戸期は内田村として機能し、享保年間以降(1716年~1736年)は上内田村のうちとも見える。地名の由来は、「ほり(崩壊地形)・こし(崖・急傾斜地)」で、崩れた崖地と言う意味。

水沢 (みずさわ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 日吉神社

江戸期は水沢村。もとは内田村の一部。元禄時代以前(1688年~1704年)に分村した。江戸期は内田を冠称していた。但し、江戸期を通じて内田村として機能し、享保年間以降(1716年~1736年)は上内田村のうちとも見える。

地名の由来は、内田川の水源地で、水の湧く沢が多いことにちなむ

日吉神社 (ひよしじんじゃ)

所在地 市原市水沢字三つ又 238 番地 3-2

創建時期 承応年間(1652年~1655年)に勧請

祭神 大山咋命

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 内田村の鎮守であった諏訪神社を伊丹氏が地頭であった承応年間に勧請(慶長4年1600年創建とも)、氏子になるように命じられ村人は氏子替えを余儀なくされたという。その後2度の火災に遭い、当御祭神を嘉永元年(1848年)に勧請。

境内に秋葉神社(火靈魂命)・八坂神社(素盞鳴命)・浅間神社(木花咲夜姫命)がある。



崖の途中に建つ水沢神社本殿



急傾斜の参道入口の鳥居



本殿入口の上部の彫刻の扁額



本殿基礎材の置き石が懐かしい

米沢 (よねざわ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 八坂神社・淡島神社・米沢中野城址

明治元年(1868年)に起立。鶴舞藩の立藩に編入される際に、真福寺村・腰巻村・大西村が合併し成立した。

八坂神社 (やさかじんじゃ)

所在地 市原市米沢字米ノ台 30 番地

創建時期 不詳

祭神 須佐之男命

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。諏訪神社の



米沢の八坂神社の本殿の建物

境外末社。米沢の森の奥に社が祀られている



八坂神社の入口の木造鳥居



本殿内部にある内宮と祭壇



建屋の倒壊防止の支え柱

淡島神社 (あわしまじんじゃ)

所在地 市原市米沢字大西 715 番地

創建時期 不詳

祭神 日本武尊

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。
宝永年間(1704年~1711年)に再建され
境内に老婆神社(伊邪耶美命)がある。

淡島神社の拜殿建物



安房神社の鳥居と狛犬・本殿



境内にある老婆神社の社



浅間大神を祀る石碑

金刀毘羅神社 (こんびらじんじゃ)

所在地 市原市米沢字稻荷台 404 番地

創建時期 不詳

祭神 大己貴命

宮司 松井 由香里

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。諏訪神社の境外末社。

金刀毘羅神社の鳥居



金刀毘羅神社の石の祠



白山・天神・稻荷三社の石碑



境内にある地藏様

米沢中野城址（よねさわなかのじょう）

所在地 市原市米沢

築城時期 不詳

築城主 不詳

説明 米沢中野城は、奉免白山城と真ヶ谷城の中間点の位置にあるつなぎの城か、物見台のあった所と思われる。国道409号線の「安久谷」のバス停の所から細い道を山の方に向かって行くと、右手に池があり、その向こうに見える比高50mほどの山が城跡と言われています。城跡には、土橋などが残っているとされていますが、登城口は発見できない。

本資料は、次の資料を参考に作成しました。

- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
 - ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
 - ・全国遺跡報告総覧
 - ・日本の城郭・城址（千葉県版）
 - ・八百万の神
 - ・市原市・宗教法人一覧
 - ・市原の城郭と国府跡をたずねて
 - ・Wikipedia- 市原郡
 - ・市原市歴史と文化財シリーズ
- ・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

内田地区の地名の由来と史跡と文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満1020番地1

連絡先 090-3545-1113